

飛鳥井雅経の『春日社百首』詠

稲葉美樹

はじめに

稿者は、飛鳥井雅経の定数歌を順次読み進める作業を行っている。本稿では、『明日香井集』五二八～六二八（注一）の『春日社百首』（以下、本百首という）について検討したい。本百首は「元久二年十二月三日於宝前被講七ヶ日参籠之間詠之」との注記を持ち、藤原氏の氏神をまつる春日神社に元久二年（一一〇五、雅経三六歳）に参籠している間に詠まれたことが明らかである。なぜ参籠したのかも、本百首により推測できるので、後述したい。

本百首の構成は、春（五二八～五四七）・夏（五四八～五六七）・秋（五六八～五八七）・冬（五八八～六〇七）各二〇首、雑二一首で、このうち雑は前半の一〇首が釈教（六〇八～六一七）、後半が述懐（六一八～六二八）となっている。百首歌でありながら百一首存するのは、末尾に長歌と反歌を有するためである。『明日香井集』には長歌はこれ一首しかなく、この参籠並びに本百首詠作が雅経にとって重要な意味を持つものであったことを推測させる（注二）。本百首からは八首が勅撰集に入集している。すなわち、五三三（『玉葉集』九八）・五五一（同三三〇）・五五五（『新千載集』二七二）・五八一（『続千載集』五四五）・六一八（『玉葉集』二七九三）・六二五（同二四八六）・六二七（『新千載集』二二三五）・六二八

（同二二二一）である。

ところで、雅経の定数歌を読んでいると、本歌取詠や、流行表現などを用いた歌が多いという共通性は有するものの、それぞれの定数歌に特徴があり（注三）、雅経はその都度何らかの課題を持って作歌していたのではないかと思われる。本百首にも、いくつかの特徴が見られる。まず、歌枕詠が三九首存し、雅経の、稿者が既に調査した定数歌中で最も多い。その中で、本百首が詠まれた地である春日を含む大和国の歌枕を詠んだ歌は二四首を占める。また、風を詠んだ歌も三二首（「風」二首、「木枯し」・「山おろし」各一首を含む）と多い。釈教においては十喩を詠むが、これは雅経以前の作例は多くはない。一方、先述した本歌取詠等は、実は本百首においてはさほど多くない。本歌取詠と、先行歌の影響下にあると思われる作とを合わせ、二五首である。比較のため、稿者が調査した他の定数歌における数値を詠作年代順に示すと、『正治後度百首』二一首、『老若五十首歌合』一四首、『千五百番歌合』三三首、『百首和歌 建仁二年八月廿五日』（実数は八七首）三一首、『千日影供百首』（実数は九九首）三三首、である。また、雅経は本歌を取り過ぎる傾向があることは多くの方が指摘されているとおりであるが、本百首においてはそれも少ない。流行表現等は、流行表現・珍しい表現が二例ずつ、新しい表現が三例、本百首以前に見られない表現が六

例で、これも他の定数歌に比して少ない。本稿では、①歌枕詠、②十喻歌、及び、春日社参籠と本百首詠作の目的を考えるため、③述懐歌、の三点について検討したい。

一 歌枕詠

前述のように、本百首には三九首の歌枕詠が存する。稿者が調査した雅経の他の定数歌における歌枕詠の歌数は、『正治後度百首』二四首、『老若五十首歌合』一〇首、『千五百番歌合』三〇首、『百首和歌 建仁二年八月廿五日』三〇首、『千日影供百首』一六首であり、本百首の歌枕詠の多さは他を大きく引き離している。一首に二箇所が詠まれている歌が十首あるため、箇所数は延べ四九箇所となる。そのうち二度詠まれている歌枕が三箇所、三度詠まれている歌枕が一箇所あるため、四四箇所。歌枕が詠まれていることになる。部立別では、春九首、夏八首、秋八首、冬一〇首、雑のうち、釈教にはなく、述懐四首である。歌枕の国別の内訳は、大和二箇所、山城八箇所、播磨三箇所、信濃・摂津各二箇所、伊勢・越前・常陸各一箇所、所在不明二箇所である。同一歌枕が複数回詠まれているのは、春日山・吉野・佐保川が二度ずつ、三笠山が三度で、いずれも大和国である。本百首を奉納する春日社の存する大和国の歌枕を幅広く詠もうとしたがために、歌枕詠が多くなったとも考えられよう。また、四四箇所の歌枕のうち、半数近い一八箇所が山で、さらにそのうちの一二箇所が大和国である。山の次に多い原・野は六箇所、川は四箇所にとどまる。なお、この傾向は風を詠む歌にも類似しており、山に吹く風の歌は一二首、原・野と川とは四首ずつである。

本百首には流行表現や新しい表現は少ないと前述したが、歌枕詠には詠まれている歌枕そのもの、あるいは詠み方に新しさを感じさせるものが見られる。それらのうちの何首かをとりあげてみたい。

五五七 さなへとる山田原のならばはいな葉もまたぬかせぞよぐなり

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く

かみのますやまだのはらのつるの子はかへるよりこそ千世はかぞへめ

さかずともここをせにせむ時鳥山田の原のすぎのむら立

〔『新古今集』卷三、夏、二二七、西行〕

山田原は伊勢国の歌枕。雅経歌は『古今集』歌を本歌とする。昨日早苗を取ったと思ったのに、早くも稲葉がそよいで、秋風が吹いている、と詠む本歌に対し、季節を早苗を取る頃に移し、まだ稲葉も茂っていないのに、榎や柏にそよそよと風が吹く、と詠む。山田原の作例はここに示した順歌が初出かと思われ、西行が詠んだ後、慈円・藤原家隆・後鳥羽院ら新古今歌人が詠んでいる。その後も作例は見られ、比較的新しい歌枕と考えられる。

五八〇 もりあかすつきにころをつくばねのすそわのたるの秋のかりいほ

あきの田にいほさすしづのとまをあらみ月と友にやもりあかすらん〔『新古今集』卷四、秋上、四三二、藤原顕輔・『久安百首』

三四三〕

「つくばね」に「尽く」を掛ける。筑波嶺（または筑波山）と月との取り合わせは少なく、雅経と同時代までに当該歌以外には『新編国歌大観』で検索する限り七例しか見えない。このうち、家隆に四例見られる。雅経にも当該歌のほかは一例存する。また「もりあかす」は、当該歌以前に詠まれたことが明らかかな作は、ここに示した顕輔歌のみの新しい表現である。その後の作例は少なくない。当該歌・顕輔歌とも、「（月が）洩り明かす」と「（自分が）守り明かす」を掛ける。『百人一首』にも撰ばれた「秋の田のかりほのいはのとまをあらみわが衣手はつゆにぬれつつ」（『後撰集』卷六、秋中、三〇二、天智天皇）を、顕輔歌は本歌とし、雅経歌は念頭において詠まれ、洩れてくるものを露から月光に置き換える点も共通する。『後撰集』歌には仮庵で過ごす夜の佳しさが強く感じられるが、雅経歌からは、洩れさしこんで仮庵を明るくしてくれる月光の美しさを楽しむ気持が読みとられる。本百首において当該歌以外に、歌枕と、詠み込まれた素材との取り合わせが珍しい例に、五八二番歌の深草と擣衣、五八五番歌の石田の小野と葛、の二組がある。また、五六〇番歌に詠まれている鹿背山は、「衣かせ山」と詠むのが一般的であるが、「袖にかせ山」と詠んでおり、この作例はほかに見出せない。

五四七 けふならでいまいくかともなき春をとぶひののもりえや
はとどむる

かすがののとぶひののもりいでて見よ今いくかありてわか
なつみてむ
（『古今集』卷一、春上、一八、よみ人しらず）
ゆくとしをとぶひののもりいでて見よいまいくかまで冬のよの

月

夕すずみとぶひののもりこの比やいまいくかありて秋の初風

（『秋篠月清集』一二七六）
（『拾遺愚草員外』五四四）

当該歌は『古今集』歌を本歌とする。「飛火野」は、この『古今集』歌以来、「若菜」などの語とともに早春の景を詠むのが一般的である。しかし、雅経は本歌の「今いくか」の語を用いつつ、春は今日しかない、と歌って惜春の歌とした。同様の例はここに示した、藤原良経や藤原定家の作などに見られる。良経歌の詠作年次について青木賢豪氏は、建仁元年（一一〇一）十二月二日か（注四）とされておられ、当該歌以前の作ということになる。良経歌も「今いくか」の語を生かしながら、歳暮の歌に転じている。定家歌は晩夏の歌であるが、承久二年（一一二〇）の「四季題百首」中の一首であり、本百首より後の作である。飛火野といえは早春という従来の枠組みを越えようとする試みが新古今時代に行われていたと考えられ、当該歌はそのうちの一首と位置づけられよう。

五四六 かは風にちるだにあるをやまぶきのゐでこすなみに春や
行くらん
泊瀬川流るる水脈の瀬を速みゐで越す波の音の清けく

（『万葉集』卷七・一一〇八・一一一一）

「ゐで」（堰・井手）は川の水をせきとめたところの意で、「ゐでこすなみ」は『万葉集』に見られ、その後の作例も少なくない。その多くがここに示した『万葉集』歌を念頭に詠んでいると思われる、初瀬川を詠みこむ。しかし雅経歌においては、「やまぶき」がとも

に詠まれていることにより、「ぬで」には歌枕の「井手」が掛けられていると考えられる。このような詠み方は本百首以前には見出しえないので、雅経の工夫であろう。

このほか、前述の歌枕詠の歌数に含めていない二首にも触れておきたい。「さむしろに衣かたしくはしひめのまくらにみよのよるのあじろぎ」(五九六)は「宇治」の地名は詠まれていないが、「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ」(『古今集』卷一四、恋四、六八九、よみ人知らず)を本歌としている上、宇治の景物として著名な網代木を詠んでおり、宇治を詠んでいることは明白である。独り寝する橋姫の枕もとに波が寄せる、寒々とした冬の夜の宇治川の光景を詠む。また、「なつのひもたけふのこぶのゆふすみそでは秋の心あひのかぜ」(五六三)は、歌枕ではないが、「武生の国府」という場所を詠む。催馬楽の「道の口武生の国府に我はありと親に申したべ心あひの風やさきむだぢや」による。都を離れ武生の地で暮らす人の心境を歌った催馬楽を、さわやかな夕涼みの歌に転じている。

本百首には多くの歌枕が詠まれているが、その中には以上のよう
に詠法等において新しさを求める作が含まれている。

二 十喩歌

本百首の釈教歌には十喩が詠まれている。十喩は『維摩経』第二の方便品に見え、人の身のはかなさを十のもの(聚沫・泡・炎・芭蕉・幻・夢・影・響・雲・電)に喩えている。

本百首以前に十喩を詠んだ例で、家集にまとめて収められているのは、『公任集』(二八九〜二九八)・『赤染衛門集』(四五五〜四六

三)・『風情集』(藤原公重)(二二五〜二三三)である。ただし、『公任集』には「聚沫」がなく、かわって「水の月」がある(注五)。「赤染衛門集」においては、『新編国歌大観』が底本とする島原松平文庫蔵本では、「幻」の歌と、次の「夢」の詞書を欠くが、『赤染衛門集全釈』(注六)では桂宮本によって補っている。『風情集』では「聚沫」・「夢」がなく、「水の月」がある。ほかに十喩の一部を収めるものに、『嘉言集』(一七)夢、『禅林瘵葉集』(藤原資隆)(九三・九四)聚沫・夢、「法門百首」(寂然)(八一)雲、がある(注七)。

勅撰集入集歌は、『後拾遺集』一一八九(芭蕉)『公任集』二九二・二一九〇(水の月、小弁)、『千載集』一一〇二(泡)『公任集』二八九・一二三四(水の月、藤原永範)・一二三四(夢)『禅林瘵葉集』九四・一二三五(夢、登蓮)、『新古今集』一九七二(夢)『赤染衛門集』四五九、『続古今集』七五二(泡)『赤染衛門集』四五六・七五三(夢)『公任集』二九四、『玉葉集』二六七五(雲、小弁)・二八一七(水の月)『公任集』二九〇、の計一首であるが、「水の月」をのぞくと、前記の家集所収歌以外は二首に過ぎない。

雅経の十喩歌を検討したい。

是身如聚沫

六〇八 はやくゆくいはまの水のわくらばにうきてもめぐるあは

れよの中

是身如浮泡

六〇九 にはたづみはかなくむすぶうたかたのきゆるもよその袖
のうへかは

是身如炎

六一〇 はるの野にやくともえゆくわかくさのあはれをこめてた
つ煙かな

是身如芭蕉

六一一 あひにあひてよを秋風のふきもあへずまづやぶれぬる草
のはもうし

是身如幻

六一二 世中よなほあはれなりまぼろしのうつりやすきはならひ
なれども

是身如夢

六一三 むばたまの夢と見つつもおどろかすながきねぶりにむす
ぼほれつつ

是身如影

六一四 いとひかねうきは身にそふかげろふのあるかなきかのよ
をやたのまん

是身如響

六一五 たに風のひびきばかりを契にてきくもあやなきやまびこ
のこゑ

是身如雲

六一六 ながむればむなしきそらをうきくものさすらへはてむゆ
くへしらずも

是身如電

六一七 あきのたのほのうへてらすほどもしやみをはなれぬい
なづまの影

比喩に用いられているものが、いずれも和歌に詠まれることのも
い素材、または身近なものであるからであろうか、先行する十喻歌

の影響を受けたことが明らかでない。しかし、国枝利久氏が指
摘される通り（注八）、『宝物集』に「維摩経の十喻の心、昔今の歌
にもよみて侍るめり。少々申すべきなり。」として例歌があげられ
ているが、その中にあるいは雅経が念頭に置いて詠んだかと思われ
る歌が二首見られるので、始めに検討したい。

最初に十喻最後の電（稲妻）歌を取りあげる。雅経歌は、「あき
のたのほのうへてらすいなづまのひかりのまにも我やわするる」
〔古今集〕巻一、恋一、五四八、よみ人知らず）を本歌とし、秋
の田の稲穂を一瞬だけ照らした稲妻を詠む。稲妻の一瞬の光が去る
と再び周囲が闇に包まれる様子にはかなさを讀みとることはできる
ものの、人の身のはかなさという十喻の趣旨を満たしていないよう
に思われる。しかし『宝物集』に掲げられている次の歌を介すると、
雅経がどのように詠んだことが理解できるのではないだろうか。す
なわち「世中を何にたとへん秋の田のほのかにてらす宵のいなづま」
（源順）である。この歌は、これも国枝氏のご指摘のとおり、『後拾
遺集』（巻一七、雑三、一〇二三）に入集するほか『順集』（二二五）
に長い詞書を有して収められており、『後拾遺集』・『順集』では第
三句「秋の田を」、詠作状況は明らかである。それによると、応和
元年（九六一）七月十一日に四歳の女子、同年八月六日に五歳の男
子を失った際の詠で、十喻を詠んだものではない。しかし雅経は、
『順集』の詞書を知らなかったか失念して、『宝物集』の記述により
順の作を十喻歌と認識し、これに引かれて作歌してしまったのでは
ないかと考えられる。

次に六首目の「夢」詠であるが、これは本百首より後の作も含め、
当該歌のほかに、十喻中で最も多い六人の作が現存している。はか
ないものとしてしばしば和歌に詠まれており、詠みやすい題であっ

たと思われ、様々な詠み方がされている。その中で雅経だけが「ながきねぶり」すなわち無明長夜を詠むが、これは平安時代末期から和歌に見られるようになる表現である。『宝物集』では永縁の「ながき夜の夢」の中に見る夢はいづれうつつといかがさだめん」を掲げている。これは『風雅集』（巻一七、雑下、一九〇一）に入集するが、『堀河百首』の「夢」題の歌（一五四八番）であって、これも十喩歌ではない。「ながき夜の夢」は『堀河百首』詠としては無明長夜を詠んだか否かは明白でない（注九）。しかし『宝物集』のように十喩歌として読む場合には無明長夜と解せるのではないだろうか。雅経はこの永縁歌から想を得た可能性が考えられる。

その他の歌も見て行きたい。「聚沫」を詠んだ歌は、現存するのは六〇八と『赤染衛門集』四五五番歌と『禅林瘡葉集』九三番歌のみである。次の「泡」との詠み分けが難しいと思われるが、雅経は聚沫題を泡がたぐさんでできる岩間の急流、泡題を水たまりで詠むことにより区別している。六〇八は「あはれ」に「泡」をかけ（ただし、泡は歴史的仮名遣いで「あわ）、急流に浮いて流れる泡のように、つらい思いをしながらこの世を廻る人を詠み、六〇九は、水たまりで結んで消える泡も人事とは思えない、とし、二首の動と静が対照的である。六〇九には「にはたづみ」の語が詠まれているが、『三宝絵』序に「世ハ皆堅ク不全ル事、水ノ沫、庭水、外景ノ如シ」と見え、新日本古典文学大系によると、「庭水」に本文と同筆で「ニハタツミ」の振り仮名がある。雅経が『三宝絵』を念頭に詠んだ可能性も考えられるが、「にはたづみ」の語は『万葉集』以来多く詠まれている。

「芭蕉」は、物名歌ではあるが『古今集』に既に見え、以後もさほど多くないものの作例がある。芭蕉を詠んだ十喩歌は、雅経歌を

含め四首存するが、少しずつ表現は異なるものの、いずれも風によって破れた芭蕉の葉を詠む。公任は「風吹けばまづやぶれぬ草のは」赤染衛門は「あき風にくだくる草のは」、公重は「かぜにやぶるるばせを葉」で、雅経歌は公任歌と表現が一致している。雅経が公任歌を参考にしたとも、芭蕉の葉の特徴と歌の主題とから、詠み方が限定された結果とも考えられよう。

「影」題で雅経は、「かげろふ」を詠んでいる。「影」と「陽炎」を掛けているかと思われるが、「炎」題で公任・公重は陽炎を詠んでいる。

「雲」題で雅経は、「むなしきそら」を詠むが、これは「虚空」の訓読語で、流行表現である。『新古今集』に八例見られる。また、『拾玉集』には一二例存し、慈円がこの表現を好んだことが知られる。雅経は当該歌のほかに二首に用いている。

以上、十喩歌を検討してきた。雅経が本百首の釈教歌の題に十喩を選んだのは、藤原氏と関わりの深い維摩会が存在があるからというところもあるが、それ以外の理由もあるのではないかと思われるので、次節で考える。なお、公任以来「聚沫」ではなく「水の月」が詠まれることが多かった中で、聚沫を詠んだのは、あえて聚沫と泡とを詠み分けようとの意志によるのではないかと思われる。

三 述懐歌

雅経の春日社参籠と本百首詠作の動機は、述懐歌により推測することができる。結論から言うと、それは昇進の願いと考えられ、特に位が上がることを望んでいたようである。この述懐歌と関わる、雅経の三年余り前からの官位を公卿補任により示すと、次のとおり

である。

建仁元年（一一〇一、三三歳）正月二十九日 兼越前守・任右少

将

二年

正月五日 叙正五位下

元久二年（一一〇五）

正月二十九日 任加賀権介

二月三日 本百首詠作

建永元年（一一〇六）

正月六日 叙従四位下

正月十三日 還任左少将

ところが、本百首の位置は「左近衛権少将正五位下行加賀権介藤原朝臣」となっている。また、この間の作品の位置を『明日香井集』で見ると、建仁元年二月の『老若五十首歌合』・同年六月頃詠進の『千五百番歌合』ともに「従五位上守左近衛権少将藤原朝臣」、『百首和歌 建仁二年八月廿五日』では「正五位下行左近衛権少将藤原」である。『老若五十首歌合』・『千五百番歌合』の諸本を閲した結果からも、建仁元年正月に雅経が任じられたのは左近衛権少将であり、その後何らかの事情で任を離れて、建永元年正月に復したと考えられる（注十）。これを踏まえた上で、以下、この述懐歌を讀み進めて行きたい。

六一八 神がきにひくしめなはのたえずして君につかへんことを

しぞおもふ

『玉葉集』卷二〇、神祇、二七九三

六一九 かすがやままだたにふかきいはね松かたきは神のめぐみなりけり

六二〇 ことしだにまつにはかけよふぢのはないかにみかさのや

まのなもをし

六二一 はるをまつそではいつかこむらさきわがもとゆひのしもぞふりぬる

六二二 ねぎかくるなみだのいろやふかからんおもはぬそでもあけのたまがき

六二三 うしとのみみとせかけつるとしなみのなみなみならで身のしづむらん

六二四 みなかみのあはれはかけよさほがはのたえゆくすゑのみくづなりとも

六二五 あるもうくなきもかなしきよの中をいかさまにかはおもひさだめむ

『玉葉集』卷一八、雑歌五、二四八六

六二六 そのかみのちぎりをしのにたのみても袖になみだや七日ひざらん

短歌

六二七 あまのはら ぶりさけあふぐ 春の日の ひかりあまねく

てらすよに などかきくらす うき雲の あるにもあらず さすらひて へにけるかたを かぞふれば みそちあまりの

よるのしも いかにもむすびし ちぎりにか みなかみきよき さほがはの しづむみくづと なりはてて あへずしほるる

藤なみの さこそ下葉の 下にのみ 末がすゑにて かれぬとも ゆかりのいろの ひとしほは 松にかけても かすがなる

みかさのやまの なにしおはば 身をしるあめも そらはれて なほひさかたの つきもせず あゆみをはこぶ たまぼこの

みちをたづぬる いそのかみ ふりにしあとは とほくとも きみにつかへて むかしべに かへるためしは おほあらしきの

もりのした草 しげければ しげみがなかの つゆばかり た

のみやあると かしこみて たむくる神の ゆふしでに なび
くぼかりの いへの風 ふくとなけれど ことのはに 心のい
ろを あらはして かきあつめつる ももくさや そのかずか
ずの めぐみをぞおもふ

〔新千載集〕卷一八、雑下、二一三五

反歌

六二八 あはれとも人こそしらね人しれぬころのうちは神のま
にまに (同右、二一三六)

冒頭、春日社に相応しく注連繩を詠みこんだ序詞を用いながら、
絶えることなく我が君に仕えたいという意志を示す。この序詞は
「うれしくはのちの心を神もきけひくしめなはのたえじとぞおもふ」
〔千載集〕卷二二、恋二、七〇九、藤原顕季」とほぼ同一であり、
顕季歌が念頭にあった可能性も考えられる。当該歌はこの述懐一
首の中で、いわば序のような役割を果たしており、以下、読み進め
るに従って、雅経の願いが何であるのかが次第に示される構成となっ
ている。

六一九番歌の春日山は、いうまでもなく藤原氏を象徴するが、
「まだ谷深き岩根松」は自身を暗示するか。「まだ」に、今はまだ沈
淪しているが、の気持を込めているのではあるまいか。「かたき」
は岩根松が生えている岩の「堅き」に「難き」をかけ、得がたいの
は神の恵みであると嘆く。

六二〇では、「松」に皇室を、「藤」に藤原氏である自身を喩え、
せめて今年は、と期待をかける。注目されるのは、近衛府の異名
「三笠の山」が詠みこまれていることである。その三笠山の名が惜
しいとは、少将の地位にはあるものの、現在の状況に満足していな

いということであろうか。

六二一でも春に会うのを待つ心境を詠む。この歌は「君こそはね
やへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも」〔古今集〕卷一
四、恋四、六九三、よみ人しらず）を本歌とし、長い時間の経過を
表現しているが、歌の主題は全く異なる。「こ紫」に「来む」をか
けて、春を待つ自分のもとに、いつ春は来て衣の色が紫になるのか
と詠み、「もとゆひのしも」により、願いが果たせぬまま髪が白く
なるほど年月が経過したと訴える。六二七にも「ゆかりの色」(網
掛け部分)と詠まれているが、これも五句前の「藤なみ」のゆかり
の色、すなわち紫と考えられ、同じ趣旨を述べていると思われる。
こう考えると、六二〇の「まつ」と「ふぢのはな」も同様で、「ま
つ」には「待つ」がかけられており、衣の色が紫になることを待つ
心境を詠んだと解される。

六二二では、願いを掛ける思いの深さを、紅涙によって袖が朱の
玉垣のように赤く染まったと表現するが、それとともに「あけ」は
衣の色を表していよう。六二〇から六二二をあわせて考えると、雅
経は正五位下の少将にとどまっていることを嘆き、四位に叙せられ
ることを望んでいるのではないかと解される。なお、「思はぬ袖も」
は、思いがけず私の袖も、の意。「思はぬ袖」は「きりぎりすなく
なるのべはよそなるをおもはぬそでに露のこぼるる」〔山家集〕四
四七)が初出か。当該歌と西行歌以外には新古今時代の作に六例、
後代に三例見られるのみである。

六二三では、つらいとばかり思っ三年間を過ごしたと、沈淪の
嘆きを訴える。この「三年」は、建仁二年に正五位下に叙せられて
以来の三年余りをいうのではないだろうか。

六二四の「佐保川」は、春日山に発する。その「絶えゆく末の水

「屑」とは、藤原氏の末裔で、沈淪する自身の比喩である。同様の表現は六二七に見えるが、「みなかみきよき さほがほの しづむみくづと なりはてて」（実線部）と、より明白である。そのような自分に哀れみをかけてほしい、と春日の神に祈る。

六二五は、抽象的な詠みぶりとなっているが、ここまでの内容のまとめのような役割を果たしている。

六二六の「七日」は、この参籠の七日間を指す。六一八から六二五に表出したような思いを抱えて、自分は現在参籠しているが、その間中、涙が乾くことはないのか、と詠む。ただし「そのかみのちぎり」が何を指すのかはわからない。

六二七は以上の九首の集約といえよう。この歌から参籠理由等について新たに知られることはないが、「みそぢあまりの よるのしも」（点線部）と老いの意識が明白にされている。この歌でも「かすがなる みかさのやまの なにしおはば」（波線部）と歌われているが、六二〇とほぼ同じ趣旨と考えられる。六二七には「家の風」という語が見える（二重傍線部）。これは「家風」の訓で、家の伝統、家業などの意であるが、久保木哲夫氏のご論文に示されているような（注十一）、重代の和歌の家の意で詠まれている場合も少なからず存する。ここでも同様の意とも、春日の神を氏神とする藤原氏一門の意とも考えられるが、前者と解する。自分の家は重代の歌の家ではないが、和歌に思いのたけを表現して書き（「搔き」をかける）集めた、ということになるか。次の「ももくさ」は本百首を指しており、「そのかずかずのめぐみ」とは、本百首詠作により、その百という数のような数々の恵が得られることを思う、の意か。雅経の家は重代の歌の家ではないが、祖父頼輔の兄が教長であることへのひそかな自負はあったかも知れない。

六二八では、人知れぬ心のうちを表出し終え、あとは神の御心にゆだねる、として本百首を結んでいる。

以上、述懐歌について検討してきた。雅経が本百首詠作の翌年正月六日に従四位下に叙せられたことにより、彼の希望はかなえられたと考えるとよいのではないだろうか。参籠と詠作には成果があったことになる。

ここで述懐歌の前に十喩歌が置かれている理由を考えてみたい。これは、十喩歌において人の身のはかなさを印象づけた上で、沈淪する自身の境遇を訴え、神に恵みを請うという構成であると考えられる。雑の二題は別個のものではなく、十喩題は自身の願いをより効果的に訴えるために選ばれたものであろう。

なお、六二七番歌の第二句「ふりさけあふぐ」は、「ふりさけ見るとするの一般的なである。両者の意味に大きな違いはないが、「ふりさけあふぐ」の方が、より高さを感じさせる。当該歌以外の用例は、「春日山ふりさけあふぐ言のはのむかしの跡を猶たのみつ」（『新統古今集』巻二〇、神祇、二二〇九、藤原雅縁）一例のみである。雅縁（法名宗雅）は雅経から数えて六代目の子孫で、この歌が六二七番歌を意識して詠まれたことは明らかであろう。

まとめ

以上、雅経の『春日社百首』について、いくつかの点から検討を試みた。本百首には、歌枕詠と、本稿では扱うことができなかったが「風」を詠んだ歌とが多く、本歌取詠と流行表現等を用いた歌とは比較的少ないという特徴がある。詠まれている歌枕は、大和国のものが圧倒的に多い。流行表現等を用いた作は少ないものの、歌枕

詠に新しさを感じさせる詠法が見られるほか、地名を示さずに歌枕を詠むなどの工夫も見られる。

釈教では十喻を詠むが、これは次の述懐歌の内容をより効果的に訴える役割を担っていると考えられる。また、雅経歌に先行の十喻歌の影響が明らかでないが、『宝物集』に十喻歌として示されている歌を念頭に詠んだと思われる作は存する。

本百首で最も注目すべきは述懐歌であろう。この時の春日社参籠の理由、及び本百首詠作の動機が示されていると考えられるからである。そしてそれは四位に叙せられることかと推測され、本百首詠作の一ヶ月余後に実現しており、参籠と詠作の成果があったものと考えられる。本百首からは八首が勅撰集に入集している。本百首が私的な作品であること、本百首と近い時期に成立した雅経の私的な定数歌に『百首和歌 建仁二年八月廿五日』・『千日影供百首』があるが、前者の勅撰集入集歌が三首、後者にはないことを考えると、八首という数は注意してもよい多さなのではないだろうか。その八首中、述懐歌が四首を占める。本百首の述懐歌は雅経の切なる願いが込められたものであり、人の心を捉える詠であったと考えられる。

注

- 一 和歌の引用は、本文及び歌番号とも『新編国歌大観』による。また、催馬楽は新編日本古典文学全集、『三宝絵』・『宝物集』は新日本古典文学大系による。『万葉集』は、本文は新編日本古典文学全集により、歌番号は新編日本古典文学全集・『新編国歌大観』の順に示した。

二 久保木哲夫氏は「平安期における長歌の意味」(『国文学論考』

都留文科大学国語国文学会、第四号、一九六七年(二月)において「個人の心情を、あらたまつた形で述べる」訴嘆には、「長歌形式の方が、よりつよく、より効果的に、訴える力をもっていたはず」と述べられているが、これは本百首の場合にもあてはまっているよう。

- 三 たとえば『老若五十首歌合』・『千五百番歌合』では雑歌は羈旅歌に偏っている、『千日影供百首和歌』では『万葉集』歌の撰取が目につく、など。拙稿「飛鳥井雅経の『正治後度百首』詠」(『日本文学』(日本文学協会)二〇〇四年一月号)・「飛鳥井雅経の『千五百番歌合』詠」(『十文字学園女子短期大学研究紀要』第三四集、二〇〇三年度)・「飛鳥井雅経の『老若五十首歌合』詠」(『十文字国文』第十号、二〇〇四年三月)・「飛鳥井雅経の『百首和歌 建仁二年八月廿五日』詠」(『十文字学園女子短期大学部研究紀要』第三五集、二〇〇四年度)・「飛鳥井雅経の『千日影供百首和歌』詠」(『十文字国文』第十一号、二〇〇五年三月)参照。

四 『藤原良経全歌集とその研究』笠間書院、一九七六年、二二一ページ。

- 五 十喻を詠んだ和歌については国枝利久氏「維摩経十喻と和歌」(『仏教大学研究紀要』通巻第六四号、一九八〇年三月)に詳しい。十喻を詠んだ歌の中に「水の月」詠が含まれる問題については、同論文及び『公任集注釈』(竹鼻績氏著、貴重本刊行会、二〇〇四年)三三七から三三九ページで考察されている。

六 関根慶子氏・阿部俊子氏・林マリヤ氏・北村杏子氏・田中恭子氏著、風間書房、一九八六年、四一三ページ。なお、『秋

風集』に「あつまれるあわ」すなわち聚沫歌として赤染衛門歌が収められているが、これは「泡」題の赤染衛門歌と第二句が異なるのみである。

七 『嘉言集』一八番歌は、一七番歌の詞書を受けるが、内容が合致しないため除外した。

八 注五の論文。

九 木船重昭氏は無明長夜と解されているが（『堀河院百首和歌全釈』笠間書院、一九九七年、六二八ページ）、久保田淳氏（『堀河院百首和歌』明治書院、二〇〇二年、二八二ページ）・滝澤貞夫氏（『堀河院百首全釈』風間書房、二〇〇四年、三八三ページ）は、単に「長い夜」とされている。

十 『明日香井集』は、冷泉家時雨亭叢書『中世私家集上八』及び宮内庁書陵部蔵本（五〇一・一〇〇）・高松宮旧蔵本とも異同はない。『老若五十首歌合』は、彰考館蔵本・宮内庁書陵部蔵本（一五一・三六七）・高松宮旧蔵本・熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本、『千五百番歌合』は、陽明文庫蔵本・彰考館蔵本・高松宮旧蔵本二本・国文学研究資料館初雁文庫蔵本・神宮文庫蔵本とも「左」に異同はない（時雨亭叢書以外は国文学研究資料館のマイクロフィルムまたは紙焼き写真本による）。有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』（風間書房、一九六八年）でも「左」に異同はない。

十一 『家の風』―『後拾遺集』と大中臣家―『フェリス女学院大学国文学論叢』フェリス女学院大学文学部日本文学科発行、一九九五年。

A Study of Masatsune Asukai's Kasugasya-Hyakusyu
**Miki Inaba (Japanese Language and Literature)

キーワード 春日社 百首歌 歌枕 十喩 沈淪 述懐歌